

【二】 次の――線部①～⑩の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 不必要な言葉を省き、一文を短くした方が良い。
- ② 人の気配をまるで感じない通りだ。
- ③ お金は工面するから心配しないでくれ。
- ④ 梅干しは昔から保存食として重宝された。
- ⑤ 外国で道に迷い、右往左往する。
- ⑥ さつまいもをもらったのでムし焼きにした。
- ⑦ 良い勉強法を聞いて、サツソク行動に移した。
- ⑧ 事故のないよう、キリツを守って行動しよう。
- ⑨ 試合終了の笛がなるまで油断はキンモツだ。
- ⑩ 祖父は田舎でジキウジソクの暮らしを送っている。

【一】次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

聴覚障がいを持ち、手話と筆談で周囲とコミュニケーションをとる「ぼく」（孝司）と、病気で頭髪を失った中山はテニスをこよなく愛する中学二年生。互いに頑固で負けず嫌いな性格の二人はひよんなことからダブルスを組むことになった。反発しながらも猛練習を積み、少しずつ距離が縮まってく。ところが試合の数日前、事件が起こった。「ぼく」の父親が経営するコンビニエンスストアで、中山が仲間から万引きを強要されるのを見てしまい、「ぼく」ははげしく動揺する。そして中山はテニスをやめるとコーチに告げ、「ぼく」の前から姿を消した。姿を見せない中山の態度とうとう「ぼく」も試合には出ないと言い切ってしまう。

ぼくはあの時、見てはいけないものを見てしまった。

それは中山が今までひたすら隠し続けていたものだった。あいつは、あんな場面をぼくに見られなかったはずだ。ダブルスを組み、ボールを追いかけて、競い合い続けてきた相手に自分のもろさを見られてしまったことは、あいつにとっては耐えられないことだったろう。

仲間に執拗にからかわれ、馬鹿にされ続けていた中山の姿はあまりにも惨めだった。そして、怒ることも歯向かうこともせず、ただご機嫌取りの作り笑いを浮かべていたあいつの姿はそれ以上に痛々しかった。

（中略）

「出場は取り消さない」

それがコーチが残した言葉だった。ぼくはどうしようもない気持ちになってそのままベンチに座り込んだ。自分でもわかっていた。あの時のことを後悔していた。

あの時、中山が店を出ていった時、どうしてぼくはあいつを追いかけてなかったのだろうか。

ぼくはあの時、力づくでもあいつを押しとどめ、なんとしてでも伝えるべきことがあったはずだった。

A

ぼく

※2 坂井さんがぼくの肩を叩いた。

そして、手帳の新しいページにゆつくりと文字を書き付けた。真剣な顔付きだった。

〈安田コーチがどうして手話ができるか、君は知ってるかい？〉

ぼくは首を振った。坂井さんは頷き、

B

文字を続けた。

〈彼ね、大学の山岳部だったろう。実はね、同じ部の中に補聴器を付けてる友人がいたんだよ。そう、君みたいに手話が上手な子で、安田コーチは一緒に山に登るたびに少しずつその友人から手話を教わったらしいよ〉

初めて聞く話だった。ぼくが知っていたのは、コーチが昔はテニスプレイヤーではなく登山家だったということだけだった。

〈大学卒業の前にね、不幸なことがあったんだよ。その友人がひとりで海外の山に登ってね、亡くなってしまったんだ。滑落事故だったらしい。本当はその山はともひとりで登るような山じゃなかったんだよ。しっかりとしたチームを組んで協力して登らなければ成功することが難しい山だったんだ。単独登頂に成功した人は数名しかいなかった。でもその友人はあえてその単独登山に挑戦したんだ〉

ぼくは手帳に懸命に文字を書き付けている坂井さんの顔を見た。

たまらなく辛そうな顔をしていた。ひよつとしたら坂井さんもその登山で亡くなった人とは知り合いだったのではないかと思った。

〈安田コーチにとってこの友人の死は耐えきれない哀しみだったらしい。彼ね、それ以来、一度も山には登っていないんだ。登山とは縁を切ってね、ずいぶんめっちゃくちな生き方を続けてたらしい。せつかく入社した商社もあつという間にやめちゃってね、仕事も転々としたんだよ。ちようどそんな時にぼく、彼と再会してね、テニスをしないかって誘ったんだよ〉

顔をあげ坂井さんはやつと笑顔を浮かべた。コーチとテニスを始めた頃のことを思い出しているようだった。

〈のめり込んだのめり込んだ。彼ね、そこまでやるかってくらいテニスにのめり込んでね、あつという間にぼくなんかを

追い越して大会優勝の常連になってしまったんだよ。もう当時は、今以上に真っ黒だったんだよ、彼（彼）
声をあげて坂井さんは笑った。

坂井さんの楽しそうな声の響きが補聴器を通してぼくに伝わった。思わずぼくも頬をゆるめた。
「彼、言ってたよ。俺はテニスに救われたって」

テニスに救われた……。

その言葉が胸の奥に残った。

坂井さんは書き続けようかどうか少し迷っていたようだったが、決心したように文字を続けた。

「彼の友人がひとりで登山に行く前にね、実はふたりの間に大きな衝突があったらしいんだ。それまでは無二の親友だったのに、何かのきっかけで大喧嘩し、一切連絡を取り合わなくなってしまったらしいんだ。コーチね、友人の死を知るまで、友人がその危険な海外の登山に出かけたことも知らなかったんだよ。彼のことだから、友人がそんな登山をしようと計画しているのを聞けば、必ず止めたと思うよ。そして、それでもだめなら、彼、絶対に一緒にいていつて命懸けでサポートをしたと思う。彼のことだからね」

すでにコートには予約している人たちが入ってきていて、ベンチに居残っているぼくたちのほうを怪訝な顔で見ている。坂井さんはそんなことには構わず手帳に書き続けた。

「孝司君さ、中山君にちゃんと会って話しなよ。たぶんコーチもそれを望んでいると思うんだよ。コーチにとつては、君と中山君が、C 自分と山で亡くなった友人みたいに思えるんじゃないのかな。すれ違ったままであっさり終わってほしくないんだよ」

ぼくと坂井さんは荷物を抱え、急いでコートを出た。

② 照明が明るく灯ったコートでは、すでにナイターの練習が至る所で始まっている。

坂井さんは駐輪場のほうに行こうとするぼくの肩を叩いた。D、軽く手を振り、自分の車が止めてあるほうにバッグを重そうに抱えたまま歩いていった。

庭球場からの坂道を自転車でするぼくの目には、遠く港に浮かぶ外国船の明かりが見えた。

自転車の速度が増すにつれ、風がぼくの顔に体に吹き付けてきた。

中山に会わなければいけないと強く思った。ぼくはひたすら坂道を下り続けた。

道路から幾筋か入り込んだ所にあるアパートの前で、ぼくは、中山と共に公会堂に行った日のことを思い出していた。あの時、ぼくはこの場所でやつが出てくるのを待っていた。けれど、今日はなんとしてでもあいつを引っ張り出さなければならなかった。

バッグの奥を探り、いつも持ち歩いているノートとペンを取り出した。

今さらながら、聞こえない自分、話せない自分という存在が悔しかった。

階段を上り、二階のいちばん端の部屋のチャイムを押した。

チャイムが響いているのかどうか、部屋の奥から返事が返ってきているのかどうか、ぼくには、はっきりとわからなかった。

ぼくにはこの扉が開くまで何度も何度もチャイムを押すしか方法がなかった。

やがて扉が開き、女の人が顔を出した。

香水の匂いがした。たぶんこの人が中山の母親なのだろう。鼻筋と目元が中山にそっくりだった。濃い化粧をし派手やかな服を身に付けていた。これから仕事に出かけるところなのだろう。

ぼくは頭を下げ、懸命に声を出した。

③ 「中山、いますか？」

中山の母親は不安そうな表情を浮かべた。

ぼくはもう一度繰り返した。けれど、誤った発音だらけのぼくの声が彼女に伝わるはずがなかった。覚悟はしていたことだった。

ぼくはノートを取り出し、懸命に文字を書き付けた。

〈中山に会いに来ました。ぼくはあいつとダブルスを組んでいます〉

母親はその文字をのぞき込み、困ったように眉根を寄せた。どうしたらいいのか迷っているようだった。

〈試合があるんです。あさってダブルスの試合があるんです〉

ぼくは再び文字を書き、母親に突き出した。たぶん彼女はテニスの試合のことなど知らないのだろう。ただ驚いたような顔でぼくを見た。

どうにも埒があかなかった。

ぼくは頭を下げると、そのまま靴を脱いだ。そして家に入り込んだ。母親は、ぼくを止めるわけでもなく、ただうろたえているだけだった。

台所の板間の先に別の扉が見えた。外国のテニスプレイヤーの写真が貼ってある。ぼくは構わずその扉を引き開けた。部屋の奥にあるベッドの上に中山がいた。

寝転がって音楽でも聞いていたのだろうか、半身を起こしてぼくのほうを見上げると驚いた顔をした。頭にはあの時と同じようにバンダナを頭巾のように巻いていた。

坂井さんは、ぼくと中山がしっかりと話し合うことを安田コーチが望んでいると言った。

けれど、ぼくと中山がそんなふうにはわかり合えるまで話せるはずがなかった。ぼくとこいつの間には言葉という壁があったし、素直になれない理由がいくつもあった。

気が付いた時にはぼくはやつの胸倉をつかみ、ベッドの上から引きずり下ろしていた。

中山もぼくを弾き飛ばすように腕を振り回した。ぼくと中山は部屋の中央でにらみ合って立った。やつの口が動いた。「この野郎」と中山が怒鳴っているのがわかった。

ぼくは怒りに駆られ、中山の胸倉を押し、壁のほうに思いっきり突き飛ばした。やつは背中から本棚にぶつかり、崩れるように座り込んだ。

「ふざけんな、馬鹿野郎！」

ぼくは激しく手話を作り、中山の顔を指さした。

ゆつくりと言葉を作ることなどその時のぼくにはできなかった。伝わりうと伝わるまいと、もうどうでもよかった。

「おまえが誰にいじめられようが俺には関係ないんだよ！俺はテニスをしたただけだ！テニスをしたんだ！」

中山は呆気にとられた顔で激しく手話で叫び続けるぼくを見上げていた。

「いつまでここにいるんだ。さつさとコートに來い、試合があるんだぞ！ダブルスなんだ、俺ひとりじゃできないんだ、おまえがいなけりやならないんだ！俺はおまえと組んで戦うんだ！」

ぼくの目の前で中山は本棚を背に力なく座り込んだままだった。

ずっと部屋の中にいたのだろうか、ぼんやりとした生気のない顔をしている。視線の合わないこいつの目の奥に自分の姿は確かに映っているのだろうか。

不安に襲われた。ぼくの言いたいこと伝えたいこと、そんなこと全てが中山にとってはまるで意味のないことで、こいつの住んでいる世界とは無縁のものになっていくのではないかと思った。

その時、ぼくは中山が涙を流していることに気付いた。小さな子供みたいに肩を震わせて泣いている。くそっと思った。

こんな時に泣いたりするな。

おまえはすぐ怒ってばかりのむかつく野郎でなくちゃいけないんだ。そして、テニスのことばかり考え、勝つことだけにこだわる自己中野郎でなければいけないんだ。

ぼくは深く息を吸い、声帯を懸命に震わせた。喉の奥から声を引き出し、言葉を作った。

聾学校で幼い日から習い続けた発音方法を呼び起こした。なんと少しでも中山に伝えたかった。手話がわからないこいつに、こいつがわかる唯一の方法で伝えなければならなかった。

④「まってる……から……。おまえが……くるのを……まってる、から……」

その言葉があいつの耳に届いたのかどうか、ぼくには知りようもなかった。やつはまだ子どもみたいに泣き続けていた。

中山の母親が、困り果てた顔をしてそこにいた。仕事の時間が近づいているのだろう。時計をしきりに気にしていた。ぼくは母親に一礼すると、そのままふたりに背を向けた。ぼくにできることはもうこれ以上何もなかった。

自転車を押しながら、ぼくはすでに暗くなりかけた舗道を家へと歩いた。自動車脇を通りぬけるたびに、夕方の少し涼しくなった風が頬をなでた。

俺はテニスに救われた。

安田コーチが坂井さんに言ったという言葉がふいに蘇った。その言葉はぼくの心の底にすでに息づいていた。信じようと思った。

あいつが必ずあの部屋の扉を開け、姿を見せることを。そして、いつものようにけんか腰の顔付きでテニスコートに現れることを。

舗道の先に父と母がいるコンビニの明かりが見えた。決して強い輝きではないが、安らぎを与えてくれる穏やかな光だった。

ぼくはその明かりに向かってゆつくりと進んでいった。

（福田隆浩『熱風』より）

（注） ※1 執拗に……しつこく。

※2 坂井さん……「ぼく」の所属するテニスサークルの仲間。安田コーチの友人でもあり、「ぼく」の理解者でもある。

※3 山岳部……学校、会社などで、登山を愛好するものの集まり。登山部。

※4 庭球場……テニスコートのこと。

問一

A

D

 に入ることばをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ けれど ウ まるで エ そして オ さらに

問二 ……部 a「怪訝な」・b「埒があかなかった」・c「呆氣にとられた」の文章中での意味をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

a 「怪訝な」

ア 不思議で納得できないようす。 イ 不愉快で怒りがわくようす。
ウ 悲しみに胸がいっぱいなようす。 エ 不信感で頭がいっぱいなようす。

b 「埒があかなかった」

ア おもしろみがなかった。 イ 気分が乗らなかった。
ウ すっかり困り果てた。 エ 話が進まなかった。

c 「呆氣にとられた」

ア その場の雰囲気（かんい）にのみこまれた。 イ 意外なことに出会い、驚きあきれた。
ウ 予想に反した状況（じょうきょう）にいらした。 エ 決意（けつぎ）が固まらず、投げやりになった。

問三 — 線部①「俺はテニスに救われた」とありますが、それはどういうことですか。解答さんの書き出しに続くように文章中のことばを用いて六十文字程度で説明しなさい。

問四 — 線部②「坂井さんは駐輪場のほうに行こうとするぼくの肩を叩いた」とありますが、この時の坂井さんの気持ちとして当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 期待している イ 同情を寄せている ウ 支持している エ 勇気づけている

問五 — 線部③「中山の母親は不安そうな表情を浮かべた」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「ぼく」が何かを訴えようとしているのはわかるが、その声を言葉として聞き取ることが難しかったから。
イ 「ぼく」が必死になって何かを伝えようとしているのはわかるが、礼儀正しい態度とはいえなかったから。
ウ 「ぼく」の一生懸命さはわかるけれど、仕事に行かなくてはならなくて時間ばかりが気になってしまったから。
エ 「ぼく」の言葉にならない声を聞いても意味がわからず、聞き直すこともできない自分が情けなかったから。

問六 — 線部④「まってる……から……。おまえが……くるのを……まってる、から……」とありますが、このことばを口にするまでの「ぼく」について説明した次の文章の I IV に入ることばを、それぞれ指定された字数で文章中からさがし、ぬき出して答えなさい。

ベッドの上の中山を目にした「ぼく」は、 I (2字) に駆られ、中山を突き飛ばし、手話で叫び続けた。二人の間には II (6字) があつたし、素直になれなかったため落ち着いてしつかりとは話せなかった。気づくと、中山は生気のない顔と視線の合わない目をしており、別の世界に住んでいるのではと「ぼく」は III (2字) に襲われた。しかし、それは中山の涙によって消され、 IV (12字) と思った。「ぼく」はそんな中山に自分の思いをなんとかでも伝える唯一の方法を使つたのだった。

問七 — 線部⑤「子どもみたいに泣き続けていた」とありますが、ここで使われている表現技法としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 反復法 ウ 直喩法 エ 倒置法

問八 本文の特徴として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 場の雰囲気を出すためにさまざまな表現技法が用いられている。
イ テンポを良くするために短く歯切れの良い文で書かれている。
ウ 登場人物の暗くしずんだ心を言い表すため情景描写が使われている。
エ 「ぼく」から見える景色や感じたことが一人称で語られている。

問九 — 線部X「風がぼくの顔に体に吹き付けてきた」・Y「夕方の少し涼しくなった風が頬をなでた」とありますが、この「風」の表現から読み取れる「ぼく」の気持ちを説明したものとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア Xは中山を助けなければという強い義務感が表現されている。Yは聾学校で習ったコミュニケーションの方法が役立ち、それを教えてくれた先生に感謝する気持ちが表現されている。
イ Xは心身ともに疲れ果て何もかも投げ出したという気持ちが表現されている。Yはやるべきことはもう何も無いと言えるほどに全てを出し切り、満足感のような気持ちが表現されている。
ウ Xは周囲の期待にこたえなければならぬという責任の強さが表現されている。Yは二人とも意地を張らずに本音でぶつかり合えたので、さわやかな喜びの気持ちが表現されている。
エ Xは自信がないまま向かわなければならぬという不安な気持ちが表現されている。Yは自分の精一杯の気持ちをストレートに伝えられ、達成感のような気持ちが表現されている。

人と人とのあいだには、「距離」があります。「いい、悪い」ではなく、あたりまえのことです。

こどもの頃だと、「自分とは違った人」や、「自分とはぜんぜん違う人」と会うことが、そんなにも多くはありません。

でも、大人になると違います。「ぜんぜん知らない人と話をする」というのは、大人にとつてはあたりまえのことです。こどもだって、「ぜんぜん知らない人」と話すことはあります。そして、ちゃんと話せなくても、「こどもだからまあいいや」と許されてしまいます。

「距離のある人」です。そういう人と話す時には、「丁寧の敬語」を使います。

あなたが「なんだ?」と思って黙たまっている、その人は道を聞いてきました。聞かれてもあなたには、道がよくわかりません。「どこなんだ、それは?」と、一人で考えます。考えてもわからないので、あなたは首を振ふるか、首をひねるかしました。

① あなたはべつに、悪いことをしていません。

D

、去つて行つた人は、こう思うかもしれません。

あなたには、言うべきことが二つありました。ひとつは、「なんですか？」です。もうひとつは、「知りません」です。

(中略)

(中略)

「せん知らない人」はやっぱり「知らない人」で、世の中には「近づきたくない」と思う人だっています。

「なにしてるの？ 一人なの？ 一緒にどこか行かない？」と言います。

学校では、「大声を出して逃げろ」と教えられているかもしれない。でもあなたは、もう小学生ではありません。「いきなり大声を出せ」と言われても、「そんな恥ずかしいことはできない」と思うかもしれません。もう小学生ではないあなたは、「もう小学生じゃないのだから、アブナイ人に声をかけられるなんてことはないんじゃないのか?」と思っていたりもします。だから、「一緒にどこか行かない?」と言われたあなたは、もしかしたら大声なんか出さずに、「え?」とか、「なに?」とか、「やだ」とか言うかもしれません。そうすると、どうなるでしょう?

「え？」でも、「なアに？」でも、「やだ」でも、そこには敬語がありません。あなたがその相手を、「いやなやつだな」と思っているとしても、「そんな相手に敬語を使いたくない」と思っていたとしても、「敬語がない」というのは、タメ口なんですよ。

す。つまりあなたは、見知らぬ、しかもかなりアブナイ可能性のある人にたいして、「自分のよく知っている仲間」のような口のきき方をしてしまったのです。

それは、とても危険なことです。あなたのしたことは、いきなりタメ口で話しかけてきた、見知らぬ危険な相手にたいして、「あっちへ行け」ではなくて、「そのままそばにいてもいいよ、もつと近くに来てでもいいよ」と言ってしまったのと同じなのです。

敬語というのは、「人と人との間には距離がある」ということを前提にした言葉です。「丁寧の敬語」は、「距離があるけど、この人との間の距離を近くしたい」と思う時に使う言葉でもあります。この人とは、距離を置きたい」という時に使う言葉でもあります。なんどでも言いますが、「距離がある」ということと、「E」は関係がないのです。

だから、見知らぬ人からいきなりタメ口で声をかけられたら、「なんですか？」と答えなければなりません。「です」という丁寧の敬語は、「あなたと私の間には距離がある」ということを、相手に伝えているのです。それは、「近くに来るな」ということで、「もしその警告を無視したら、大声を出すぞ」という、警戒（けいけい）警戒の意味さえも持っているのです。「もう小学生じゃないから、いきなり大声を出すなんて恥ずかしい」と思っているあなたなら、そうして相手のようすを見て、「危険だったら大声を出す」という用意を整えなければいけないのです。敬語には、そういう使い方もあるのです。

敬語の話になると、むずかしい漢字がいっぱい出てきます。いきなり「尊敬の敬語」で、「謙譲の敬語」に「丁寧の敬語」です。「尊敬」はわかります。「謙譲」は、ちよつとわかりにくい考え方ですが、「わかりにくい考え方だから、こんなむずかしい漢字を使うんだな」ということはわかります。よくわからないのが、「丁寧」です。「ていねい」は、そんなにむずかしい考え方ではありません。それなのに、漢字で書くと、なんで「丁寧」などというわけのわからない漢字になるのでしょうか？ いったい、「丁寧」とはどういうことなのでしょう？

「丁寧」を、ちよつと大きな漢和辞典でしらべると、わけのわからないことが書いてあります。「大昔の中国で、兵士の宿舎にあった楽器」だということです。ボウーンと鳴らすドラのようなものを想像してください。その楽器に、「丁寧」の文字が書いてあったのです。「丁」というのは、この場合、兵士のことです。「寧」というのは、「安心できる」ということで、「丁寧」は「兵士の安心」なのです。兵士が安心できるように、そう書いてある楽器をボウーンと鳴らすのです。でも、な

んだかへんです。こんなものを鳴らしてすごく大きな音がしたら、「安心できる」ではなくて、うるさいだけでしょう。どうしてそれが「兵士の安心」になるのでしょうか？

兵士は、戦争のためにいます。敵が攻めてくることを、いつも考えています。そういう兵士たちにとって、「安心」とはどんなことでしょうか？ 敵が攻めてこないのがいちばんの安心であるのはもちろんですが、でも、敵は攻めてきてしまうのです。「いつ敵が攻めてくるのかわからない」とビクビクしていたら、兵士たちはおちつきません。ところが「丁寧」という楽器は、「敵が攻めてきたぞ！ 危険があるぞ！」という時に鳴らす楽器なのです。つまり、非常警報なのです。防災無線と考えるでもいいでしょう。

「非常警報が人の安心につながる」——これが、「丁寧」なのです。だから、アブナイ人にタメ口で話しかけられて、「その手にのるか」と思っ、「なんですか」という丁寧の敬語を使うのは、「丁寧」のいちばん F な使い方なのです。

人と人との間には、いろんな距離があります。近くても「距離」で、遠くても「距離」です。だから、「距離があるからいやだ」と考えるのではなくて、「その距離をどうするのか？」と考えるのです。

いちばん近い人には、「距離」がなくてもいいような「ひとりごとの言葉」——タメ口でもだいじょうぶです。「ちよつと距離があるな」と思ったら、「丁寧の敬語」です。「ちよつと」どころではなくて、「すごく距離があるな」と思っ、それが「丁寧の敬語では役にたたないくらい遠い」と思っしまったら、「尊敬の敬語」や「謙譲の敬語」を使います。現代での敬語は、そのような使い方をするものなのです。

世の中にはいろんな人がいて、その人たちとの間には、それぞれ「いろんな距離」があるのです。だから、そういう世の中ちゃんと生きていって、自分の考えをつたえるためには、その人たちとちゃんと話ができるような、「敬語」というものを知っておく必要があるのです。

（橋本治『ちゃんと話するための敬語の本』より）

問一 — **A** **D** に入ることばとして最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で選びなさい。
 ア たとえば イ もしくは ウ つまり エ でも オ だから

問二 — 線部①「今の子って、ほんとにぶあいそうで気味が悪い」とありますが、このように相手をさげすむことを何と言いますか。最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。
 ア 顔をつぶす イ かたずを飲む ウ 白い目で見る エ 鼻であしらう

問三 — 線部②「あなたにはうです」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 困っている人に対して、あいそ良く丁寧な言葉づかいで接することは礼儀だから。
 イ 見知らぬ相手に対して、自分と相手との間には距離があることを示すことができるから。
 ウ 自分よりも年齢が上の相手に対して、目上の人を敬っている気持ちを伝えられるから。
 エ 初対面の人に対して、何も話さず黙っているのは相手に悪意を持っているという誤解を生むから。

問四 — **E** に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。
 ア 危険の有無 イ 会った回数 ウ 年齢の違い エ 好き嫌い

問五 — 線部③「敬語には、そういう使い方もあるのです」とありますが、これはどういうことですか。それを説明した次の文の **I**・**II** に入ることばをそれぞれ指定された字数で文章中からさがし、ぬき出して答えなさい。

I (3字) は相手との距離をなくし、相手を仲間のようにつかう口のきき方であるのに対して、敬語は一定の距離を置いて接するつもりだということを相手に伝える **II** (4字) のような役割を果たす口のきき方であるということ。

問六 — 線部④「想像」・⑥「戦争」と熟語の成り立ちが同じものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
 ア 思考 イ 自他 ウ 負傷 エ 日照 オ 新品

問七 — 線部⑤「その楽器に、『丁寧』の文字が書いてあったのです」とありますが、なぜその楽器のことを「丁寧」と呼んだのでしょうか。その理由を六十字程度で答えなさい。

問八 — **F** に入ることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。
 ア 日本的 イ 根本的 ウ 創造的 エ 平和的

問九 — 線部⑥「現代での敬語は、そのような使い方をするものなのです」とありますが、筆者の考え方にしたがって「ごく距離がある」相手に敬語を使う場合、次の文はどのように改めれば良いでしょうか。考えて答えなさい。

あなたが言った通り、今日は雨が降った。明日はどうなるだろう。

問十

この文章について説明した次の文の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 敬語を使うことは安心につながるということを敬語の語源にもさかのぼりながら説明し、読者相手にも敬語を使うことで読者を安心させようと試みている。

イ 全く異なる二つの場面を例に出して、敬語を使わないで話すことは失礼だけでなく自分と相手の身を危険にさらすことにもつながると若い読者に警告している。

ウ 気持ちの良い人間関係を築くために敬語が必要な理由を最初に挙げてから、どんな相手に対しても敬語を使って話すべきだという主張をくり返し述べている。

エ 敬語を使う理由や場面について例を挙げて説明しており、この文章自体も丁寧語を使って書くことで筆者が読者と適度な距離を取ることを実践^{じっせん}している。

安田コーチは無二の親友を登山での
滑落事故で失い、

141

合	計

11

【三】

【三】